柳田國男「青ヶ島還住記」を読む

―地域に誇りをもつということ―

Reading *Aogashima Kanjuki* by Yanagita Kunio: A discovery of local pride

土　屋　　久*
Hisashi TSUCHIYA

要旨：本稿は、柳田國男「青ヶ島還住記」を読み込むことで、この作品に込められた、柳田の主たる想いを検討したものである。それと同時に、その想いは青ヶ島の今日的な課題に届くのか、こうした問いにも一定の考察を試みた。その結果、先の作品の主たる想いは、島の少年達に誇りをもたせたいとのことであり、彼のこの想いは、今日、地域おこしに、ますます重要な意味をもってきている点を指摘した。

キーワード：柳田國男，「青ヶ島還住記」，青ヶ島，地域起こし，誇り

はじめに

柳田國男の「青ヶ島還住記」（以後「還住記」）は、昭和８年（1933）８月から10月まで雑誌『嶋』に連載され、後に『島の人生』の中に納められた小品である。その内容は、有人島として伊豆諸島の最南端に位置する青ヶ島の、江戸時代後半の島起こしの歴史を描いたものである。

青ヶ島は、周囲約９km、面積5.98㎢の世界的にも珍しい複式火山の島で、山頂の噴火口部分が海面に出た形態となっている。そのため島の周囲は200mほどの切り立った崖で、集落は外輪山上の少ない平地部分に存在する。また島の回りには黒潮の本流が流れ、島外との交流を阻んでいる。現在では、船やヘリコプターの定期便が隣の八丈島との間を結んでいるが（船は平均週四日就航、ヘリコプターは毎日就航）、船の就航率は５割ほどで、ヘリコプターの客席数は９席、運賃も決して安いとはいえない。そのため、今日でも渡島が容易にできる島であるとは言い難い。

島は、過去に何度も噴火災害に見舞われた経験を有す。特に、天明年間（1781－1789）の被害は大きく、天明５年４月の大噴火にあたっては、全島民が離島を余儀なくされ八丈島へ逃れた。以後、天保６年（1835）に帰島を果たすまで、半世紀間青ヶ島は無人島となった。この50年にわたる苦難の末に故郷への帰還を成し遂げた歴史的な事件を、「還住」乃至「起し返し」と呼んでいるのである。

*つちや　ひさし　客員研究員・順天堂大学保健看護学部（非常勤）

柳田は、この「還住」の歴史を『八丈実記』という著作に記された内容をもとに再構成し、標題の作品をものしたのである。柳田以降、「還住」の記録は、多くの小説[(1)]の題材となり、また、民俗学や社会史等[(2)]の研究対象ともなってきた。

「還住記」は、所謂論文ではなく、どちらかというと柳田の想いが所々に綴られた随筆風の文章である。本稿では、まずは、「還住記」に描かれた柳田の主たる想いを検討する。また同時に、彼の想いは青ヶ島の今日的な課題に届くのか、この問いにも一つの見通しをつけてみたい。

1 「還住記」の構成

はじめにでも触れたが、「還住記」は、近藤富蔵（1805－1887）の『八丈実記』に記載された資料におっている。

富蔵は、北方探検家として著名な旗本近藤重蔵の長子として生まれたが、22歳の時に殺傷事件を起こし、八丈島に遠島になった。今日『八丈実記』として広く知られる書物は、富蔵が八丈島に流罪となっている時に書き溜めたものの一部であると考えられる。富蔵は亡くなる直前の明治20年（1887）に、自身が書いたものを東京府に買い上げられるのだが、その経緯が次のような文章として残っている。

> 其嶋三ッ根村（八丈島三根村－土屋）近藤冨蔵生存中編纂セシ八丈実記六拾九冊ノ内全ク八丈ノ実記ニ係ル分二拾九冊今般代価五拾円ニテ府庁へ買上ケ相成候ニ付テハ右代価及送付候条同人孫近藤富蔵（近蔵か－土屋）へ下付請書ヲ徴シ廻送有之度此段及照会候也（近藤1972：225）。

この買い上げられた29冊は、東京府文書課記録係により36巻の体裁に直されて都政資料館（現東京都公文書館）に保存されることとなった（八丈町教育委員会　2003：75）。

柳田は、おそらく上述の36巻に編纂されたものの内、「青ヶ島大概記」「青ヶ島略記」などの青ヶ島関連の資料を駆使して「還住記」を書いたものと想定される。

「還住記」には、天明年間の噴火により八丈島へ全島避難した青ヶ島島民の、帰島を果たすまでの苦闘が、編年体で描かれている。その概略を以下に年表風にまとめておく。

安永９年（1780）　地震が続き、池の水が熱くなって手を入れられなくなる。
天明元年（1781）　噴火が起こる。
天明３年（1783）　大地震・大噴火。死者も出る。
天明５年（1785）　これ迄の中で最も激烈な噴火起こる。
　　202人が島を出るも、出る事叶わなかった130から140名が亡くなる。
寛政元年（1789）　名主三九郎らが青ヶ島の実況調査に赴く。
寛政５年（1793）　三九郎ら20人が青ヶ島に帰り、島に小屋掛けし、12人が残る。
寛政６年（1794）　夫食を積んだ船が青ヶ島に向うも、途中で難破し、房州に漂着。
寛政７年（1795）　一番船、八丈沖で難破。乗組８人溺死。二番船は青ヶ島に到着。
寛政９年（1798）　三九郎ら14人青ヶ島へ出発するが難破し、紀州へ流され、三九郎ら11人が死ぬ。
享和元年（1801）　青ヶ島に残っていた７人が八丈島に戻る。

文化14年（1817）　名主次郎太夫が青ヶ島起し返しの願い書を八丈島の役所に提出。
天保６年（1835）　名主次郎太夫に率いられ、青ヶ島の島民が島に戻る。「還住」の達成。[3]
「還住」の歴史的な記述自体は、「還住」が成功し、島で検地がおこなわれたというところで終り、最後に青ヶ島漂流民のエピソードを記して「還住記」の筆は置かれている。

２　「勇猛心」「勇気」「勤勉」「忍耐」

柳田の「還住記」は、これまでも評論や研究の俎上にあげられてきた[4]。こうした先行する業績を具に検討する作業は別項でおこなうとして、取り急ぎ本稿では、はじめにで述べたごとく「還住記」に込められた柳田の想いに沈潜してみたい。
柳田は「還住記」の冒頭で、次のように言っている。

> ちょうどその年（文政十年、1827年－土屋）から四十三年前、遠く八丈の東南に孤立する青ヶ島に、前代未聞の大噴火があって、いっさいの生業のたつきを失い、命からがら救われて出て来た者の、これがその子孫であり、またはわずかなる生存者であったのである。
> この人々はそれからさらに八九年の後に、異常の勇猛心を振い起して、辛苦艱難を嘗め尽くした末、ようやくのことでもとの島に還っていった。それが今日の青ヶ島住民の先祖なのである（柳田　1968：411、傍線部土屋）。

ここで柳田は、現在の青ヶ島住民は、噴火災害を逃れた希少な存在であり、また、「異常な勇猛心を振い起し」た人たちの子孫であると規定しているのだが、この「勇猛」「勇気」という言葉は、「忍耐」という語とともに、「還住」を完成させた青ヶ島の人びとに冠せられる用語で、「還住記」の中で度々使われている。他を見ていくと例えば以下である。

> 青ヶ島の人々は、この基金を頼りにして、もう一度島に戻って行く勇気を起こしたようである（柳田 1968：426-427、傍線部土屋）。

「この基金」とは、八丈島三根村で御船預りという要職に就いていた高村三右衛門が、八丈島に避難してきた青ヶ島の人たちに出した義捐金のことである。それを使って、「還住」をおこなう「勇気」を青ヶ島の人たちは奮い起こしたと指摘しているのである。
「忍耐」についてもみておこう。「還住」を成し遂げた次郎太夫が名主となり、人々の間に「還住」への新たな希望が見え始めた頃の様子を次のように柳田は描写する。

> 仲間がそのつもりをもって余分の勤労をしたことと、新たな希望ができてから、異常の忍耐をしたことだけが、かなり明瞭に記録の端々から窺い得られる。（中略）何にしても名主次郎太夫の勇気と細心とが、よくこういう難事業を遂行するに適していたことは、青ヶ島のために特質大書すべきことに相違ない（柳田　1968：41、傍線部土屋）。

引用部分の前半では、傍線部にみられるように、青ヶ島人の「忍耐」をうたい、後半では、次郎太夫を「勇気」ある人物と評している。「忍耐」の語の少し前で、「余分の勤労」という用語を

もって、島人の勤勉を語っているのも注目されるところである。

ところで柳田は、「還住」を成功させた次郎太夫を高く評価しており、その事跡をモーゼがユダヤの民をエジプトからカナンの地に導いた故事に仮託し、彼のことを「青ヶ島のモーゼ」（柳田　1968：414）と称している。また別所では、「還住」実現に向けて人びとを諭し、名主である自分を始めとした諸役についている人びとを、事細かに戒めている点を「事は極めて小さいがその懇切の点に於て、昔の諸葛武候が三軍に号令した物語さへ連想せしめる」（柳田　1968：433）と賞賛してもいる。[(5)]

青ヶ島は、確かに小さな孤島であるが、そこでおこなわれた事業は決して小さくない。このことを柳田は、次郎太夫の事跡を世界史上の偉人のそれに比定することで語っているといえよう。

そして柳田は、この「還住」という出来事を、まずは「青ヶ島の少年たち」、そして「地理の生徒」に知ってもらいたいと言うのである。

> 私の知らせておきたいと思うのは、まず第一には青ヶ島の少年たちだ。それからまたこういう歴史をもった島が大海のまん中にあるということを、一度も教えてもらわなかった地理の生徒たちにも、好奇心をもって聴かせてみたい（柳田　1968：411）。

ここには柳田が「還住記」に込めた想いが明白に現れていよう。柳田は、先祖が成し遂げた偉業を語り聴かせることで、「孤島」の少年達を鼓舞し、自身の島に誇りをもたせたいと考えたのである。また、同時に、島の外の年若き少年達にも、その中でも取り分け地理を勉強する者たちに、偉大なる歴史をもった島があることを発見させ、彼らの認識を広めさせたかったのである。

柳田が企図した、「還住」という歴史を知り、島の少年達に誇りをもってもらいたいという「目論み」は、今日学校教育の中に取り込まれ、見事に受け継がれている。

青ヶ島村の小中学校の補助教材である『わたしたちの青ヶ島』には、「還住」について以下の記述がある。

> ゆうた「何回も船がしずんだり人が死んだりしても、あきらめずに青ヶ島にわたり人が住めるか調査したんだね」
>
> まりこ「おじいさんの話だと、島のようすがすっかり変っていて、のみ水はほとんどなく、砂と岩だらけの荒れ地になってたそうよ。それに、せっかく苦労して作物を作っても、ネズミがたくさんいてみんな食べられたんだって。」
>
> たくみ「それでも、自分たちが生まれ育ったふる里へ帰りたかったんだね。ぼくたちも、当時の人たちの努力と勇気ある行動を誇りにしなきゃ。」（東京都青ヶ島村立青ヶ島小中学校編集　1998：87）。

青ヶ島の小中学生は、義務教育を通じて「還住」の歴史を学び・知り、自分たちの島に対する誇りを高めているのである。

おわりに

柳田は、「還住記」の終わり少し前の部分で、当該書を書いた当時の青ヶ島の現状について次

のように述べている。

今日の青ヶ島は全体に世間と遠くなって居る。稀に此島に上陸する人はあっても、胸の合う迄に語りかわす機会はない。（中略）
我々の耳に入る最近の島の消息は、如何にも不自由な島だということばかりである。定めし島の人たちも、同じように考える傾きになったことと思う（柳田　1968：442）。

青ヶ島は、明治11年（1878）に東京府に組み込まれ、島外と交通をして生活をする時代になった。そうなると、整備された湊をもたないということが、青ヶ島の幸福を割り引いている（柳田：442）、と柳田は指摘しているのである。翻って21世紀の現在、島への交通は柳田の時代とは比べ物にならないほど便利になった。とはいえ、先に記した通り、依然渡島は簡単とはいえないというのも事実である。こうした中、青ヶ島は、アメリカの環境保護NGOであるOne Green Planetにより2014年度の「死ぬまでに見るべき世界の絶景13選」に日本で唯一選ばれたことにより、インバウンドが激増するとともに、日本人観光客も急増した。一種の「観光バブル」を迎えているのである。柳田の時代と違って、島に上陸する人は稀ではなくなったのだ。しかし、渡島して来る人が増えた分、中には島の生活上のルールを無視する観光客もいるという。また、青ヶ島の景観が、生活・文化の場として捉えられるのではなく、単なる消費される・見られる対象でしかなくなる傾向も出てきたとのことだ。今、島は新たな問題に直面しているのである。この状況に危機感を抱いた、30歳代の若い島の世代を中心に、彼らは先の『わたしたちの青ヶ島』をテキストとして育った第一世代だが、「還住」の歴史を始めとした島の誇りを見いだし、それを島の内外のイベントや講座等で語る動きも見え始めている。[(6)] 観光の問題を通じて、地域の誇りを再確認する試みがなされているのである。
ところで、地域の誇りを語ることが、観光を考える上で重要な課題となることを、観光文化論を専門とする井口が次のように指摘している。

「生活者」が自らのまちを良く知り、誇りをもってわがまちを語ることから観光が始まるのである。観光の経済効果獲得のみに呪縛された地域は、誇りをもって自らを語ることはできないだろうし、来訪者はやがて絶えていくに違いない。そこに暮らす人々の命と暮らしが充実してこそ、矜持が生まれ、その矜持に惹かれた来訪者は再来訪者となって、やがては、真の「観光者」となるのではないだろうか（井口　2008：218）。

引用文中の「観光者」とは、聞き慣れない言葉であるが、「主体的でかつ地域への文化的波及効果を確実にし得る人々」（井口　同上）のことをいう、と井口は定義している。先の青ヶ島で始まっている試みは、島の歴史や生活、文化に敬意をもって来島する青ヶ島ファン層獲得の営みでもあり、このファン層は、井口の文脈で述べるならば、「観光者」ということになろう。
今年（2017）は、次郎太夫が「起し返し」を再開した文化14年（1817）からちょうど200年目に当る。柳田が「還住記」に込めた想いは、今日古くなるどころか、彼の想像を越えた領域でその重要性を益々深めているといえよう。

註

(1) 例えば、井伏鱒二『青ヶ島大概記』(1934年)、山田常道『火の島のうた』(1981年)、三田村信行『火の島に生きる―悲劇の島・青ヶ島の記録』(1987年)、高田宏『島焼け』(1997年)。

(2) 例えば、民俗学・社会史では、宮本常一他監修『日本残酷物語』第2部(初版本、1960年)。

(3) 数字や年号には諸説有り。ここでは、「還住記」記載の内容に従った。尚、享和元年は、原文では、享保元年だが、享和に改めた。

(4) 例えば、文芸評論家の涌田佑は、井伏鱒二の「青ヶ島大概記」と比較しながら、「還住記」を次のように位置づける。

その中心に据えられていることは、〈還住記〉という題名が象徴するように、幾多の災害によって廃墟と化した青ヶ島へ、人々がどういう理由で戻っていったのか、またどういう方法で戻っていったのか、ということの考察に他ならない(涌田　1983:163-164)。

また、民俗学者の赤坂憲雄は、「還住記」の中心的なモチーフを次のように規定している。

多くの島の外にある人々の島に向けての関心を呼び覚ますこと、それが柳田のモチーフの大きな部分を占めていたことは確実だ(赤坂　2000:264)。

(5) 旺盛な詩心をもち、ロマン派の若き詩人として将来を嘱望されながらも、経世済民の志をもって農政官僚となった柳田にとって、青ヶ島の起し返しを実現させた次郎太夫は、理想的な人物像の一典型として捉えられたものとも考えられる。

(6) 「還住」の歴史を掘り起こし、島起こしへとつなげる動きは、過去にもみられる。「還住」の歴史と青ヶ島の島起こしに関しては、別項にてまとめたい。

〈参考文献〉

赤坂憲雄(2000)『海の精神史　柳田国男の発生』小学館

井口貢(2008)「『国の光を観す』ということ」『観光学への扉』学芸出版社, pp.216-226

近藤富蔵(1972)『八丈實記6』緑地社

東京都青ヶ島村立青ヶ島小中学校編集(1998)『わたしたちの青ヶ島』改訂版

八丈町教育委員会(2003)『島を愛した男　近藤富蔵―ある流人の生涯―』改訂版

柳田國男(1968)『定本柳田國男集第一巻』筑摩書房

涌田佑(1983)「井伏鱒二と柳田国男―『青ヶ島大概記』と『青ヶ島還住記』」『井伏鱒二の世界』集英社, pp.139-168